

被災当事者による災害伝承についての実践研究

Exploring a Disaster Storytelling Method through Survivors' Reflections on Recovery Experience

○宮本匠・石塚直樹

○Takumi MIYAMOTO, Naoki ISHIZUKA

This research explores opportunities of passing survivors' post-disaster experiences via a short piece of writing by them reflecting on own experiences. This method, newly named "Hisao no Hitorigoto (literally translated as "monologue by Hisao")", was established in a study group which aimed at revisiting their Great East Japan Earthquake experiences. The method involves short senryu-like writing that only constitutes several words. This briefness makes authors and readers less burdensome to develop and read, much easier than those writings for traditional memoir and disaster education materials. It also has the advantages of leaving some rooms for readers to interpret, which enables them to verbalize difficult experiences of which may involve conflicting values. In addition, the method of fragmented personal experiences into short writings allow readers to better comprehend authors' personality. "Hisao no Hitorigoto" has implications and potentials to share disaster recovery experiences that have not yet been achieved in any previous methods used.

1. はじめに

本研究は、被災者の「独り言」と名づけられた短文の表現形式によって、被災者自身が復興をふりかえり、その経験を伝承することの意義と可能性について研究することを目的としている。被災者の「独り言」は、宮城県名取市で、閑上地区まちづくり協議会のメンバーとして活動した宇佐美久夫氏が開発した「久夫の独り言」に端を発している。「独り言」は、被災してからの出来事や印象深かったことなどを、川柳のように、およそ5・7・5にまとめて表現する手法である。「独り言」には、それぞれにスライド1枚程度の説明が加えられる場合もある。この「独り言」手法は、一見大変シンプルで、どこにでもありそうなものなのだが、これまでの実践とその議論から、実は大きな意義と可能性を秘めていることが分かってきた。本稿では、「独り言」の誕生の経緯と具体的な作品を参照したうえで、「独り言」の意義と可能性を検討したい。

2. 「独り言」誕生の経緯

「独り言」作成のきっかけとなったのは、一般社団法人みやぎ連携復興センターの代表理事であった第二筆者と同職員であった高橋若菜氏が、復興の現場で活動する人々との対話をもとに企画して呼びかけた「当事者による復興省察研究会」（以下、「研究会」）だった。東日本大震災から10年

を迎えるにあたり、被災地では復興検証の動きが進んでいた。しかし、その多くは、支援者による復興支援のあり方に対する検証であったり、専門家による被災地の外からの視点によるものが多かった。そこで、公的な復興検証の場だけでなく、広く誰もが参加することができる研究会を開催し、そこで被災者自身による復興のふりかえりができないかと考え、趣旨に賛同する宮城県内で被災した人々と第1筆者が参加する「研究会」を開催することとなった。2019年11月28日、2020年2月6日に「研究会」を開催し、これまでの伝承手法を検討するとともに、参加者の関心を集めた防災教育教材「クロスロード」の宮城県版を作成してみようと話がまとまったところでコロナ禍となり、活動が止まってしまった。

転機となったのは、2020年10月24日の「みやぎボイス」だった。「研究会」メンバーに宇佐美氏が活動休止中に作成していた「独り言」を紹介してくれた。第2回「研究会」で、試験的にクロスロードを作成したときに、自分でも驚くほど当時の出来事を忘れていたことに気づき少しでも記録しておこうと「独り言」を作成していった。長い文章では誰も読んでくれないだろうと短文形式にまとめる手法に至った。この手法に関心を持ったメンバーで、「独り言」を作成しながら、この手法の意義や可能性を検討していくことになり、

2020年11月20日、12月26日、2021年1月30日、同年4月2日と継続的に「研究会」を開催した。2021年4月には、京都大学防災研究所の地域防災実践型(一般)の助成を受けることも決定し、2021年5月26日、6月15日、7月20日、9月3日、10月22日、12月17日と研究会を開催して現在に至っている。

3. 「独り言」の作成例

それでは、「独り言」はどのようなものか、図1は、宇佐美氏が作成した「独り言」の「応急仮設住宅にて」の目次の一部である。

1. 入居前、工事現場を、観てからだ
2. 我家では、震災前に、越したばり
3. 仮設でも、自分勝手は、我家です
4. カラオケは、お酒が最初の、伴奏です
5. 仮設では、当然何でも不参加で
6. 引継ぎを、安請け合いて、時間無し!
7. 他人様に、嫌われたくなく、愛想よし
8. いつ復興!我が人生も、見えません!
9. 中越の、経験、どこ行った
10. 集会所、だけでは、同じ顔
11. 仮設でも、BBQに日曜大工
12. お隣の、静けさも、心配に
13. 良くも悪くも、お酒は、便利な潤滑剤
14. 気持ち知り、深酒なるよ、要注意
15. 駅前も、4G入らず、苦情です

図1 「独り言」の作成例

「独り言」は、「避難所」や「仮設住宅」などテーマごとに、「独り言」が目次のように並べられていて、関心のあるものは図2のように説明書きが添えられたものを探して読むことができる。

4. 被害違えど、夜は、枕並べ

- ▶ 避難所には、ライフラインが停止、住まいが壊れた、流失した、家族が行方不明、様々な被害者が集まって来ました
- ▶ 同じ東日本大震災の被害者とはいえ、各々の被害の違いに震災の話は、神経を使う事でした
- ▶ ましてや、特に避難初期は、仕切りもありませんので、就寝時も人の目にさらされたままでした

図2 「独り言」に添えられた説明

図2のように「独り言」だけで何を表現しているかが分かりやすいものもあれば、例えば「炊き出しに、並ぶ、ご近所さん」のように、それだけ

では解釈に幅があり、一義的な理解ができないものもあるのが特徴だ。他にも、「間仕切り出来たけど、安否確認、手間増えた」や、「集会所、だけでは、同じ顔」のように、復興過程における課題を指摘したり、何かしらの教訓を引き出すものがある一方で、「「頑張って」って、何を、頑張るの」や、「「俺の海」って、どんな海」のように、教訓などの物語に回収されることを拒むような、断片的な経験や問いも含まれている。宇佐美氏は、「独り言」について、「誰かに読んでもらうことを前提に書いているわけではない、けれど、だからといって読んではいけないとも言っていない」と説明している。この「独り言」についての微妙な立ち位置と短文であることが、「独り言」の独特の意義と可能性をもたらしているように思われる。

4. 「独り言」の意義と可能性

「独り言」の意義と可能性について、第一に、手記や防災教育教材に比べて短文であるために、作成者にとっても読者にとっても容易である特徴がある。そのため、これまでの伝承手法に比べて、より多くの人々に参画が期待できる。

第二に、短文であるがゆえに、断定するのではなく、解釈の余地を残すことができるために、当事者だからこそ言語化しにくいことを表現可能にする利点がある。高台移転や原子力災害など、被災者の中でも意見が分かれることが多かった東日本大震災では、当事者だからこそ言語化しにくい状況があるが、「独り言」は価値表明を抑制することができ、当事者でも言語化しやすい。

第三に、「独り言」は短文だからこそ逆に読み手がその向こう側に広がる世界を豊かに想像することができる。手記や防災教育教材では取り上げられないような、教訓や物語の手前にあるような被災後の日常の瞬間が言語化されることで、読み手は作成者の人となりを知ることができるのだ。

最後に、「独り言」は、ワークショップでのさまざまな活用可能性があることも見えてきた。例えば、「仮設住宅」のようにテーマを決めて、それぞれに作成して披露しあったり、誰かが作成したものに、連歌のように連想して作成を続けることも可能である。

このように「独り言」は、災害伝承にこれまでかかわることの難しかった人々がより参画しやすいように促すとともに、伝承の中身を豊かにしていく可能性を秘めている。